

暮らしと健康の月刊誌

ケア

5 2018
May



特集

- 脳卒中と脂質異常症
- 結膜炎 ● 気管支ぜんそく
- 高濃度乳房とは ● ガングリオン
- 関節リウマチと薬物療法

コミュニケーションロボット導入が好評集める

小規模多機能ホームなどでしこ

一般社団法人元町会が運営する小規模多機能ホームなどでしこ（函館市）はコミュニケーションロボット「パルロ」を導入し、好評を集めている。ロボットは会話・歩行能力、ネット接続機能、人工知能を備え多彩な表現力で人間との円滑なコミュニケーションを図れることが特徴。

パルロは全長約40cm、センサーで相手の顔を認識し、名前を覚えることも可能。相手ごとの会話内容や趣味嗜好なども記憶として蓄積し、会話に反映できる。インターネットから天気やニュース、ピククスなども得ており、最近ではオリンピックの話などを交えながらコミュニケーションを成立させているという。また、唱歌から最近の流行歌までダンスをしながら歌を披露したり、クイズ、ゲーム、落語、占い、健康体操なども

提供し、レクリエーションの場でも利用者を喜ばせている。なでしこが提供している小規模多機能型居宅介護サービスは、住み慣れた自宅で生活できることを目的に、施設への「通い」を中心に、短期間の「宿泊」や自宅への「訪問」を組み合わせ、生活支援や機能訓練を行うことが目的。

「当施設では1日最大5人の利用者の『泊まり』を受け入れていますが、帰宅願望のある方の対応が課題でした。施設の機能上、通いの受け入れが中心で、その方々が帰宅するタイミングにつられ帰宅を訴えるケースもあります。夜勤帯はスタッフ1名体制で、

利用者の人気を集めるコミュニケーションロボット。動作の可愛らしさに見る子どもや孫のような反応がみられているという



業務が重なると対応に追われるおそれもありました」と宮崎幸施設長はロボット導入のきっかけを述べる。実際に導入したところ利用者からの評判は上々で、特に歌を喜んで聞いている光景がよくみられるようになったという。

「帰宅願望の強かった方が、通いの利用者の帰宅時間でも一緒に歌を口ずさんだり、落ち着いた様子がみられるようになり、笑い声がよく聞かれるようになったなど、明らかに雰囲気の変化しました。現在は「コロちゃん」の愛称で呼ばれ、心待ちにしている利用者もおります」。

なでしこでは、運営母体となる社会医療法人高橋病院で毎年開催している法人研究発表会で、コミュニケーションロボットの導入が帰宅願望の軽減や夜勤帯の業務改善につながったかについて発表。

従来行ってきたトラップや輪投げ、漢字クイズなどといったレク

リエーション活動のマンネリ化が否めない中、ロボット導入がレクに集中できる環境につながり、利用者の活性化につながったことなどのメリットを指摘。一方、ロボットの活動時に見守り配置が必要となり、予想外の業務負担などのデメリットがあったことなども報告した。

ロボット導入から研究発表までの期間が短かったこともあり、今後は利用者を絞った研究にも着目したいと宮崎施設長。「利用者の笑顔が増えたことで職員の気持ちも和み、パルコ導入に大きな成果があったことは間違いありません。今後もチームで、進化するAI技術の有効活用に取り組んでいきたい」。